

国語の授業は こうする

1年生・用具言語

なまえでいおぼえる

あいうえお

小林 照子

ことばを獲得する瞬間

「WATER」

ヘレン・ケラーがことばを獲得した瞬間を思い浮かべて下さい。音声と文字と感覚とがびったりと一つになった瞬間です。聴覚にも視角にも障害があったヘレン・ケラーの人生が開かれた瞬間ともいえます。発達心理学研究の進歩と共に子どもがことばを獲得するプロセスが明らかにってきました。正高信夫氏の著書によれば生後間もない乳児でも不協和音を区別することができるのだそうです。脳や身体に障害がない子どもであれば、脳の中で身体感覚と音声とを融合させながら、こ

とばを獲得し語彙を広げていくのでしよう。

ことばは感覚と音声との融合から生まれるので、日本語の音声は日本の風土に生きている人々の感覚に支えられています。黒川伊保子氏の著書には他の言語に類を見ない日本語の音声的特徴が数多く指摘されています。私たちが日常意識しないで話したり聞いたりしていることばの根っこには、日本の風土独特の感性があるのだということを改めて考えさせられます。

小学校で覚える文字

子どもが小学校で覚える文字は、ひらがな、かたかな、漢字、ローマ字です。多くの

小学校では入学前に新入児保護者説明会を開き、入学までに子どもが自分の名前をひらがなで読み書きできるようにしてほしいとお願いしています。お願いはしていても、四月に入学してくる子どもの個人差は大きく、簡単な文をひらがなで書くことができる子どももいれば、ひらがなで書かれた自分の名前を読むことはできても、書くことが十分にできない子どももいます。

入学以前の文字学習については家庭環境によって違いがありますが、努力して文字を教えている家庭より、子どもが文字を覚えることを楽しんでいない家庭の方が多いのではないのでしょうか。本屋さんにも、おもちゃ屋さんにも、様々な種類の教材が売られています。あいうえおの絵本、あいうえおの積み木などといった昔からある教材の他に、文字が飛び

出したり、音が流れたりするからくり教材からコンピュータ教材まで挙げたらきりがありません。どんな教材教具を使っても、子どもの脳の中で「音」と「文字」とがびつたり合った時に、ひらがなが「わかった」「覚えた」と実感できるのです。

小学校では一番にひらがなを学習し、易しい漢字の学習を進めながら、カタカナ、ローマ字を学習します。子どもにとって読み書きができるようになることは大人が考えている以上に楽しいことです。そして一年生を担当する教師にとって「ひらがなの正しい読み書き」を訓練し習得させることは大きな使命なのです。

音声と文字との照合

ひらがなは一音一文字の照合で成り立っています。それなのでことばをひらがなで文字表記するためには、ひとまとまりのことばとして成立している音の連続体を一音ずつに切る必要があります。「てるこちゃん」と聞き慣れた音声をして・る・こ・ちゃん」と切り、一音一音を文字化して出来上がりです。子どもは文字を覚える前に多くのことばを習得しているので、ひとまとまりの音声として

のことばを一音一音に切ることが必要です。「てるこ こま まり りす すべりだい」「てるこ てつぼう てんとうむし」などしりとりをしたり、同じ音から始まることばを集めたりする遊びも、ことばを一音ずつに切り、一音一文字の照合をするトレーニングになっているのです。

なまえで覚えるあいいうえお

「つ・く・し」は一年生の国語の授業で最初に取り上げられることの多い文字です。筆圧が弱く運筆が自由にできない子どもにも無理なく書くことができる文字として選ばれるのです。「あ」は五十音表のトップに位置する文字ですが、書きにくいのですぐには取り上げられないことが多いようです。どの文字から順に学習するかというところは先生方の腕の見せ所だともいえます。子どもが楽しく正しくひらがな五十音の読み書きを習得し、ひらがなの使い手になるために様々な工夫が試みられています。

その中でも一番のお薦め、何度試みても手応え抜群なのが「なまえで覚えるあいいうえお」です。子どもにとって一番なじみの深い自分のなまえを中心に学習を進めるので無理

がありません。教材は担当するクラスの子どものなまえなので、授業に入る前に準備が必要です。まずは学習集団全員の姓名をひらがなにしておいて、五十音表上の分布と頻度を把握するところから始めます。二十人のクラスを仮定してやってみましょう。

あおき ゆうぞう いのうえ けんいち
うえはら てるお きのした ふみすけ
こんどう ひろき ささもり つよし
すずき しょういちろう
たなか おさむ とおやま ひかり
なかつ こうへい はやしば あきこ
ほしの まゆみ わたなべ さやか
くろだ よしえ めぐろ れみ
せきやま ねね いぬい みその
よねやま きようこ むとう ななみ
こばやし てるこ 以上二十人

ここで使われているひらがなを頻度の多い順に並べると以下になります。

う⑩ き⑦ し・い・こ・や⑥
な・み⑤ か・お・さ・の・ま・た④
え・ね・よ・ろ③ あ・け・す・ち・
て・は・ひ・む・ゆ・り・る・ん②
く・せ・そ・つ・と・ぬ・ふ・へ・ほ・
め・も・ら・れ・わ① を・に・ば②

ぐ・じ・ず・ぞ・だ・ど・べ①
しよ・きよ①

このクラスでは「つ・く・し」の次に「う」を学習することにします。そして「い」「こ」「や」と頻度の多い順に進めていくのです。頻度に大きな差がない場合は書き易い文字を先にします。そしていつでも学習の進行状態を把握することができるよう、教室の壁にあいうえお五十音表の枠を掲示して、取り上げた文字を明記します。明記されたひらがなを組み合わせることばを作ったり、自分のなまえを完成させるために足りない文字がいくつ残っているのかを確認したりすることが、全て一音一文字の照合を強化することになります。

子どもは自分のなまえの文字が出そうのはいつかと期待しながら学習に取り組むことができます。この期待を友だちと共有できることも大きな魅力です。「あおきゆうぞう」の「あ」は「はやしばあきこ」の「あ」であり、「いのうえけんいち」の「え」は「うえはらてるお」の「え」であり「くろだよしえ」の「え」でもあるのだという具合に学習を進めていくうちに、友だちのなまえも無理なく覚えてしまいます。

クラスによって五十音を全部拾うことができないう場合は、なまえに使われている文字を

全て取り上げた後で必ずもれないように扱わなければなりません。濁音、促音、拗音なども同様です。

世界で二つだけの指導案

クラス全員のなまえが出そろった時に「音と文字との照合」に焦点を当てたお楽しみ授業を行うと、文字学習への子どもの意欲がいつそう高まります。ここでも子どものなまえに使われているひらがなを使います。子どもはなまえで作ったクイズを取り入れながら進めるので、クラス全体が意欲満タムードになること間違いなしです。そのためには授業者がクイズ作りをしなければなりません。早速そのための資料を作ってみましょう。姓名を一つの単位として考えることもできますが、一年生の初期指導なので姓、名それぞれを一つの単位にすることにします。

1 一文字共有

・「う」ゆうぞう いのうえ うえはら
こんどう しょういちろう こうへい
きょうこ むとう

・「き」あおき きのした ひろき
すずき あきこ せきやま
きょうこ

・「し」きのした つよし しょういちろう
はやしば ほしの こばやし

・「い」いのうえ けんいち
しょういちろう こうへい いぬい

・「こ」こんどう こうへい あきこ
きょうこ こばやし てるこ

・「や」とおやま せきやま よねやま
はやしば こばやし さやか

・「な」たなか なかた わたなべ ななみ
「み」ふみすけ まゆみ れみ みその
ななみ

・「か」たなか ひかり なかた さやか

・「お」あおき てるお おさむ とおやま

・「の」いのうえ きのした ほしの
みその

・「ま」とおやま よねやま せきやま
まゆみ

・「た」きのした たなか なかた
わたなべ

・「さ」ささもり おさむ さやか

・「え」いのうえ うえはら よしえ

・「ろ」しょういちろう くろだ めぐろ

・「よ」つよし よしえ よねやま

・「ね」よねやま ねね

・「あ」あおき あきこ

- ・「け」けんいち ふみすけ
- ・「す」すずき ふみすけ
- ・「ち」けんいち しょういちろう
- ・「て」てるお てるこ
- ・「は」うえはら はやしば
- ・「ひ」ひろき ひかり
- ・「む」おさむ むとう
- ・「ゆ」ゆうぞう まゆみ
- ・「り」ささもり ひかり
- ・「る」てるお てるこ
- ・「ん」けんいち こんどう
- ・「ば」はやしば こばやし

2 二文字共有

- ・「て」「る」てるお てるこ
- ・「や」「ま」とおやま せきやま
よねやま
- ・「う」「え」いのうえ うえはら
- ・「あ」「き」あおき あきこ
- ・「よ」「し」つよし よしえ
- ・「う」「こ」こんどう きようこ
こうへい
- ・「い」「ち」しょういちろう けんいち
- ・「た」「な」たなか なかた わたなべ
- ・「の」「し」きのした ほしの

3 三文字共有

- ・「ば」「や」「し」こばやし はやしば
- ・「た」「な」「か」たなか なかた

4 一文字が二つ

- ・ねね ななみ ささもり いぬい
しょういちろう

準備が整ったところで、「音と文字との照合」に焦点を当てた問題を作ってみましょう。

(わたしはだれでしょう・その1)

ひらがなの順序を変えると友だちのなまえになります。さてだれでしょう。

ろきひ しつよ かさや おてる かなた
さむお そのみ ゆみま なみな みれ

うんどこ ちんけい やまねよ へいごう
のきた ふけすみ ませやき こやしば

(わたしはだれでしょう・その2)

空いているところにひらがなを二文字入れると友だちのなまえになります。さて誰で

しょう。

「」よし め「」ろ みそ「」
「」おき す「」き

「」うぞう さ「」もり
せき「」ま いのう「」

(だれかに変身・その1)

ひらがなの順序を変えて別のだれかに変身させましょう。
たなか なかた

(だれかに変身・その2)

ひらがなを二文字だけ取り替えて別のだれかに変身させましょう。順序も変えてかまいません。

てるお てるこ つよし よしえ
あきこ あおき こばやし はやしば

(だれかに変身・その3)

ひらがなを二文字取り替えて別のだれかに変身させましょう。順序も変えてかまいません。

とおやま せきやま よねやま
うえはら いのうえ こんどう こうへい

ひろき ひかり おさむ むとう
くろだ めぐろ おさむ さやか

てるお おさむ あおき つよし ほしの
あおき ひろき あきこ すずき

(なまえでしりとり)

しりとりでなまえをつなげてみよう。何人つながるかな。だれから始めてもかまいません。

あおき きのした たなか
すすき きのした たなか
せきやま まゆみ みその
おさむ むとう うえはら
とおやま まゆみ みその
よねやま まゆみ みその

(たからさがし)

なまえの中に隠れているものを見つめましょう。

ゆうぞう「ぞう」 いぬい「いぬ」
みその「みそ」 こんどう「うどん」
くろだ「くろ」 あおき「あお」
ささもり「もり」 よねやま「やま」
はやしば「はやし」 ななみ「なみ」
きのした「した」 うえはら「うえ」
たいのこえ「いえ」 わたなべ「なべ」
けんいち「けん」 さやか「かさ」

こんな具合に問題を作ります。クラス集団として集まった子どものなまえによって問題は違ってきますが、問題を作る観点は同じです。後は子どもの実態に合わせて一時間の展開を考えれば世界で一つの指導案が完成

します。

発声・発音の訓練として友だちのなまえを呼んだり、返事を返したりすることや、自分のなまえを正しくノートに書いたりすることなど、子どもの実態に合わせて学習活動の幅をひろげてみましょう。

(なまえ以外のことばで試す)

なまえで作った問題で終わらせるのではなくなまえ以外のことばにつなげることを忘れてはいけません。

順序を変えて違うことばを作しましょう。

わし しわ きみ みき
よぶ ぶよ くろ ろく
つみ みつ だるま だまる
こんぶ ぶんこ とけい けいと
みるく くるみ

一文字変えて違うことばを作しましょう。

やかん みかん かんじ へんじ
へんか しんか しずか しずむ
はずむ はずれ

なまえで学習するものの意味

今回紹介した方法は漢字の学習に応用することもできます。漢字の場合は、「音読み」「訓読み」「二音一文字」「同音異字」といった問題があるのでひらがなより複雑にはありませんが、文字の処理の仕方に大きな違いはありません。とにかくなまえは子どもがやる気になる教材なのです。

生まれてからずっと呼びかけられ続けてきたなまえは、子どもにとって身体の一部のようなものです。なまえは、自分の存在に関わる特別な音声なので、どの子にも思い入れがあり、たとえ友だちの中に同じ音声のなまえがあっても、自分だけのなまえとして認識しています。だから文字の並びを変えると別人のなまえになってしまうことにわくわくしながら学習できるのです。自分だけのなまえでも、音声を一音一音ばらばらにして他の音声と組み合わせればなまえ以外のものにもなります。子どもたちは自分にとって最も身近な音声であるなまえを踏み台にすることで、無理なくひらがなを覚えることができるのです。